

伝えたい想い

中 一

障害者差別は、障害者との交流があるかないかに関係なく、みんなが考えなくてはいけない大きな問題だと思います。

障害者を見て、「かわいそう」と言う人がいます。なかには、見た目が少し違うからといって「おかしい」や「怖い」というような表現をする人もいます。私は、その考え方や表現は間違っていると思います。なぜなら、うまく話すことができないこと、手足が動かせないこと、目や耳が不自由なこと、その全てをひっくるめて、その人の「個性」だと思っただけです。むしろ、障害者はその「個性」を理解し、健常者の私たちよりも、何倍もたくましく生きています。それは、私の経験から分かったことです。

私は、数年前に長期の入院をしながら特別支援学校に通っていました。そこには、生まれつき手足が短く生活が不自由な子、知的障害のある子や寝たきりの子、いくつも障害のある子など、たく

さんの子供たちが通っていました。私は、この特別支援学校の生活で「伝えたいことを相手に伝えること」は、とても大切だということを学びました。それは、病室が同じだったAさんとの関わりから学んだことでした。

Aさんは、生まれつき手足が短い軟骨無形成症という障害がありました。軟骨細胞の異常によって骨の形成が障害され、低身長になるとともに、全身に様々な症状が起こり得る病気です。この病気は遺伝子の変異が原因だとされるため、根本的な治療法が確立されていません。そんなAさんの第一印象は、少し気の強い子だという印象でした。私が入院して間もないころ、看護師さんと廊下で話をしていると、いきなり後ろから、

「そこ、どいてくれる。」
と強い口調で言われたことがありました。とつさに、

「すみません。」

と言って下がりましたが、このとき私は、Aさんにあまりよい印象を抱きませんでした。しかし、毎日同じ病室で過ごしていくうちに、その印象は変わっていきました。Aさんは、自分の障害を把

握っていて、伝えたいことをきちんと伝えないと自分が困ってしまうことを知っていたのです。看護師さんに何かを頼むときや、私に言いたいことがあるときも、はっきりと自分の気持ちを伝えます。そのかわり、Aさんは自分でできることは、どんなことでも一生懸命にやります。自分の身体が自由に動かないにもかかわらず、積極的にリハビリに参加し、学校での学習も人一倍熱心に取り組んでいました。その姿は誰よりも強く、輝いて見えました。こうしたAさんを見てみると、あるとき、なぜ強い口調で言葉を発していたのかわかったような気がしました。

「どいてくれる。」

と言ったAさんは、怒っているわけでもなく、不満があったわけでもなかったのです。ただ、伝えたいことはつきり伝えようとしていただけだったのです。私たち健常者は、言いたいことがあっても「面倒だから。」や「恥ずかしいから。」と言って、我慢をしてしまうことがあります。少しくらいであれば、自分でどうにかできてしまうからです。障害のある人たちは違います。我慢をして、伝えたいことを伝えなかつたら、困ってしまうこ

とがいくつもあります。だから、よりはっきりと自分の気持ちを伝えるのです。

しかし、世間ではこのような発言に対し、「いくら障害者だからといって、わがままだ。」と言う人がいます。こうした発言を聞くと、心が痛みます。私は、この特別支援学校の生活を経て、障害のある人は身近にいて、それと同時に障害者差別も起こり得ることを痛感しました。障害者差別が起こることは、とてもよくないことです。

こうした差別をなくすためには、障害への正しい知識を得ること、みんなが平等で、人格と個性を尊重し合うことが大切だと思います。そして、一人一人が自由に自己表現することや、自分らしさを発揮する社会になることが必要なのです。みなさんにも、自分から積極的に障害のある人と交流してほしいと思います。学校の行事や地域のイベントなどにより触れ合う機会を積極的にもち、理解を深めていけば、障害者差別を減らしていけるのではないのでしょうか。